

## 水野正好「まじなひの考古学事始め」のはじまり

藤澤典彦

水野の考古学は「想念の考古学」とか言われる。これは毀誉褒貶両面からの言葉のように思われる。「想」「念」共に「おもい」であるが、誉褒はそれとして、毀貶側からする「想念」には「想像」や「観念」さらには手が込んだ「捻出」の意が込められているようだ。要するに「思い付き」で、資料・史料的根拠が乏しい云々の批判的思いがある。このような見方の背後には水野の考古学の基礎を良く知らないことがあるのだろう。

確かに、この論文集でもそうだが、手ずからの実測図・製図はほとんどなく、あるのは挿絵風の絵と図面・絵画資料のコピーを組み合わせたようなものばかりである。そして考古学者の好きな編年表及び編年の議論もなく、論ずる上での方法が無いようにもみえる。ただ言っておかないといけないのは、水野は実測・トレースは極めて上手で、的を射た図を描くということである。例えば若き日の実測図に元興寺の納骨五輪塔の図がある。それは木片を削り込んでつくられるが、空風輪・水輪部分は削痕が鈍彫仏像のように乱鱗状に残してある。削痕を描くに際しては、削った方向・順番がわかるように描く、さらに墨書の実測・トレースに際しても筆の動きの順に、一面ごとの重なり(交叉)もキチッと書き、そこを無視して籠字風の縁取りをしてはいけないとの注意が後輩に残されている。水野の図にはそれらが意識的に表現されているのだ。水野にとって実測・作図とは制作の追体験でもあった。さらに、この論文集でもそうだが、註というものが一切無い。これまでの研究成果を無視しているようにも見える。果たしてそうだろうか。

これについては後述するとして・・・。

水野正好の考古学のテリトリーは広く、縄文から近世まで、いや現代までといつてもよい。その分野も広く、考古学だけでなく記紀万葉から歴史・宗教・民俗・諸文献に及ぶ。特に日記類は限無く目を通していた。これは本人から聞いた話だが、文化庁勤務時、通勤列車では毎日、日記史料を見ていて、刊本はほとんど目を通したとのことである。考古学との出会いは高校生の時であった。元々は万葉が好きで、折口信夫などもよく読んでいたようだ。あるとき行きつけの古本屋で森本六爾の『日本考古學研究』にであう。四苦八苦してそれを手に入れ、そこで考古学へと方向修正。しかし最後まで記紀万葉の香りは染みついたままで、抜けていない。その幅広さは人生そのものといえるが、背景には多くの人との出会いがあった。

高校生の時は地歴部で活動し、同時に遺跡の見学会やさまざまな研究会に顔を出すようになり、それも積極的に自分の方から出合いのきっかけを作っている。さまざまな出合いの中で大学生との付き合いも広がり、考古学の藤井直正や民俗学専攻の上井久義らとともに「ルツボの会」なる研究会をつくっている。この時から垣塙での学問の融合・合金の生成が目指されていたのである。さらに堅田直と出合い、森本六爾の研究会仲間(弟子?・子分?・弟分? いずれでも無いような...)であった藤澤一夫に行き当たった。藤澤は古瓦の研究者であったが、石造物・金石文・仏教関係遺物にも興味を持つ歴史考古学者であった。水野は藤澤を通して森本六爾を仰ぎ見ていたようだ。

大学は大阪学芸大学(現・大阪教育大学)に進んだ。堅田・藤井・上井らは共に学芸大関係者で、教授の民俗学の鳥越憲三郎の取り巻きであった。高校時代から学大とは関係が深かったのである。教育系の大学であるから特別に考古学の専攻があるわけでは無い。鳥越の民俗学は普通にイメージする民俗学ではなく、当時、琉球歌謡「おもろ」研究者として著名であった。鳥越からは古代文学的影響を強く受けたとみられる。鳥越・藤澤は近くに住んでいたこともあり、親しい関係であり、これまでに名前が出た面々は両者の間を往来していた。この人間関係の描く図形は鳥越・

藤澤二点を中心とした楕円形と見てよい。学問を志した初期からその幅は広がったのである。

大学院には紆余曲折があつたが結局は進学せず、奈文研↓大阪府教委などでのアルバイト・嘱託をしながら各地の発掘調査にも関わつた。この放浪最終段階で元興寺極楽坊の解体修理に伴う境内の発掘調査を担当する。この調査を通じて、中世以降の葬送・墓制・供養の世界にも目が向けられていく。そこで住職・辻村泰圓と出会う。当時、元興寺は奈良の考古・美術・歴史研究者のサロンでもあり、辻村は研究者に対して公私にわたる援助の手を差し伸べていた。そこでも多くの人々との出会いがあつた。極楽坊の調査室には僧侶・木下密運がいた。木下の寺は呪法実習の寺であり、関係資料が残されており、木下はその研究に意欲を見せていた。調査室は後に元興寺仏教民俗資料研究所↓元興寺文化財研究所となり、今に至つている。その元興寺・研究所とも終生深い関係を持ち、晩年は所長職も勤め研究所を援助し続けた。考古・仏教民俗・折口に近い民俗学からなる水野の学問の基本構造は若い時点ですでに出来上がつていたのである。

本論文集に収録した最初の論は文化庁勤務の一九七六年の「竹筒をのこした一井とその秘術」で、『草戸千軒』No. 36に掲載された。次いで七七年、七八年と同誌に同遺跡出土の呪的遺物に関する論を載せている。いずれも本論文集に収載されている。これらの論は文化財調査官としての指導の延長線上にあるものとみてよい。それまで水野は縄文研究者として認知されていたと思われるが、中世呪術研究という異なる側面を見せたのである。

一九七八年の『どるめん』No. 18の特集(中世まじないの世界)は中世呪術研究者宣言といつてよいだろう。そこには自作自演のインタビュー記事「まじないの考古学・事始」(『日本のまじなひ』に「まじなひの世界・事始」として収載)以外に、本書収載の二篇の文章を載せている。その他、水野を取り巻く面々、奥野義男の物忌札に関する二篇、木下密運「鎮宅棟札の呪文」、阿部泰郎「空鉢譚の世界」なども併載され、まさに中世の呪的世界が展開されている。そしてインタビュー記事の内容は後に論文となつて出てくるものが全て出そろつており、研究予告でもあつた。